

2005年7月24日 朝日新聞

# 心の発生と進化 チンパンジー、赤ちゃん、ヒト ORIGINAL INTELLIGENCE: Unlocking the Mystery of Who We Are ティヴィッド・プレマック+アン・プレマック [著]



[譯者]

天外 伺朗

作家

「心の理論」とは、他人の心を推定するのをいい、4歳ぐらいで発達する能力だ。著者は巧妙な実験により、チンパンジーにその能力があることを78年に発表した。ところが反論も多く、大論争に発展した。現在では「留守中にバナナを違う容器に移されたとき、帰ってきてどの容器を搜すか」といった、いわゆる「誤信念問題」を解くことが「心の理論」だということになり、チンパンジーでは未だ証明されていない。しかし、この一連の論争は認知心理学や発達心理学を大いに発展させた。その経緯は7章で語られているが、「心の理論」の定義に関しては、著者はかなりじぶ満け。言葉を話さない幼児やチンパンジーに様々な心理テストを実施するためには、並々ならぬ工夫が必要だ。著者の成功といふが、それでもサラに対する想いは伝わってくる。もうひとつ成功要因は、プラスチック片で単語をあらわす「プラス

チック語」を学習させたことだ。言語を学習しないチンパンジーでも「違ひ」を区別する学習を続けていくと、独自の言語（単語レベル）を発達させる。ところがその個体は「同じ」「違う」というプラスチック語を習得した個体に比べて、様々な領域ではに能力が劣る。このことから、人間の言語の知能への貢献が推察できる。ただし、メタファー（暗喩）など従来は言語特有の機能と考えられていたものが、チンパンジーにも存在する等価性といふ概念に支えられていることなども明らかにしている。

因果性とかアナロジーとか、じつに様々な能力をテストするために、方法論を工夫してチンパンジーに相対する後半部分は迫力満点で興奮を誘う。最後に、これららの知見を生かして、新しい教育論を展開しているが、一聴に値する。

人をいたしめている心の構成要素を、丹念に調べ上げた好著だ。

人類は、哲學的な観点から、自分たちがなにかを理解し始めてくる

長谷川寿一監修・鈴木光太郎訳、新曜社  
・401頁・4410円／David Premack 25  
年生まれ。心理学者。Ann 共同研究者。

## 天才サラとプラスチック語で研究発展